JR山手線又は 西武新宿線	高田馬場駅から 徒歩20分
東京メトロ東西線	早稲田駅3a出口から 徒歩5分
都営バス	学02系統 高田馬場—早大正門　早大正門から 徒歩1分 早77系統 新宿駅西口—早稲田　早稲田から 徒歩5分 早81系統 渋谷駅東口—早稲田　早大正門から 徒歩1分
都電荒川線	早稲田駅から 徒歩5分

WEBサイトから事前登録が必要です。
http://www.waseda-majesty.jp/events

お問合せ
早稲田大学科学技術ジャーナリスト養成プログラム事務局
http://www.waseda-majesty.jp/contact/index.html

早稲田大学 科学技術ジャーナリスト養成プログラム

国際シンポジウム

MAJESTy

メディアの地殻変動とジャーナリズムの将来

世界の科学技術ジャーナリスト養成の現場から

2009年
11月13日 金
13:30→17:30
於 早稲田大学 小野記念講堂
入場無料・要予約

後援:アメリカ大使館、フランス大使館

MAJESTy
Master of Arts Program for Journalist Education in Science and Technology, WASEDA UNIVERSITY
科学技術振興調整費

プログラム

13:00	開　場
13:30〜14:30	日本の科学技術ジャーナリスト養成の現場からの報告 “変わりゆくメディアにおける科学ジャーナリズムと技術ジャーナリズム” 報告　西村 吉雄 客員教授
14:30〜16:00	世界の科学技術ジャーナリスト養成の現場からの報告 報告① Baudouin Jurdant 教授 報告② Marguerite Holloway 助教授 報告③ 周 荣庭 副教授
16:00〜16:20	休　憩
16:20〜17:30	パネル・ディスカッション: マス・メディアの変容とローカルな科学技術ジャーナリズムの現場への影響 パネリスト: Baudouin Jurdant 教授 Marguerite Holloway 助教授 周 荣庭 副教授 西村 吉雄 客員教授

司　会:　谷川 建司 教授

言　語:　英語(通訳付き)または日本語

ご挨拶

マス・メディアをめぐる変革の状況は急速に進展しつつある。インターネットの全世界的な急速な普及によってもたらされた情報環境の変化により、新聞やテレビといった既存マス・メディアの存在意義が問われ始めているが、その中で科学技術という分野におけるジャーナリズムのあり方もまた問われている。大学における人材養成という枠組みで考えれば、われわれは変わり行くマス・メディアの環境の中で科学技術ジャーナリストとして働くことの具体的イメージを被養成者に対して明確に提示していくことが求められよう。

本国際シンポジウムは、ヨーロッパ、アメリカ、中国そして日本において科学技術ジャーナリズムという分野における人材養成に取り組んできた世界各地の大学関係者が一同に会する機会である。

それぞれの国や地域において、20世紀の歴史の中で“科学技術”の占めてきた地位、それを伝える科学技術ジャーナリズムがマス・メディアの中でいかなる部分を主要なチャンネルとして発展してきたのかは、時期もスタイルも様々であろう。既存マス・メディアおよび科学技術ジャーナリズムの置かれている立場についてもけっして同じではないだろう。それらを、それぞれの国・地域の第一線で科学技術ジャーナリズム教育の現場の最前線で活躍する当事者たちの現状報告によって明らかにしたうえで、グローバルに変わりつつあるマス・メディアの状況がローカルな科学技術ジャーナリズムの現場にどう影響を及ぼしていくのか、将来の展望について議論していく。

Introduction

Existing mass media are experiencing a great revolution. As the internet has rapidly developed recently, the importance of newspapers, television programs and other existing mass media is becoming questionable. It is true that the development of the internet has had an enormous impact on science and the area of information technology; however, we also cannot deny its influence on science and technology journalism. As we are designed to train students as journalists who can make a balanced assessment of issues surrounding science and technology, it is imperative that we instruct our students about how to place themselves as science and technology journalists; it is also necessary to demonstrate a model for conveying information clearly within this rapidly changing environment.

This symposium will provide an opportunity for the ones who majoring in science and technology journalism from Europe, America, China, and Japan to examine these themes together.

“Science technology” occupied a major position in the history of the twentieth century. These developments have enormous impact on mass media, one of the major channels of science technology journalism, no matter its form and style. This fact means that we need to examine the latest media in the same ways as the existing ones. In order to examine the above-mentioned issue, frontline experts, educators, and scholars will report on the existing globe-changing mass media and will exchange and discuss topics related to the influence and future development of local science and technology journalism.

登壇者

Baudouin Jurdant 教授（パリ第7大学科学ジャーナリズム研究科科長）

1997年よりパリ第7大学科学ジャーナリズムの教授。前職は、ストラスブールのルイ・パスツール大学教員。ここでは科学技術社会論の研究を専門とするフランス初の研究チームGERSULPを立ち上げその後20年間にわたって指導。また、同大学において、科学ジャーナリズムにおけるトレーニングコースもフランスで初めてスタートさせた。1962～67年に日刊紙の職業ジャーナリストとして勤務。その後「The Theoretical Problems of Popularisation of Science」についての博士論文を1973年にストラスブール大学に提出。この論文は長期間コピーやインターネットを通じて非公式に出回ったのち、フランスで出版された。1980年、物理学者のMichel Paty氏と共同で新たに国際的機関誌の「Fundamenta Scientiae」をPergamon Pressより出版、10巻が発行された。1984年にはギリシャアルファベットと硬貨制度の発明、科学知識の向上との関係についての博士論文「Ecriture, monnaie et connaissance」を提出。現在、科学ジャーナリズムの教育訓練に積極的に関わっており、科学の大衆化、科学ジャーナリズム、サイエンスライティング、自然科学対社会科学、科学人類学などについての数々の論文も執筆している。

Marguerite Holloway 助教授
（コロンビア大学 科学・環境ジャーナリズム研究科 共同ディレクター）

コロンビア大学ジャーナリズム大学院科学・環境ジャーナリズム研究科助教授、ディレクター。同大学地球環境科学ジャーナリズムのデュアル・ディグリー・プログラムの共同ディレクターも兼務。1997年からはジャーナリズムスクールで教鞭を執る。ブラウン大学比較文学の文学士号を、またコロンビア大学の理学修士号を取得している。2001年には「Distinguished Teacher of the Year」を、また2009年には「Presidential Award for Outstanding Teaching」を受賞。さらに“Scientific American”の補助編集員をも務め、特に環境問題や公衆衛生、神経科学、科学や物理における女性といったさまざまなテーマを担当した。それ以前には、“Medical Tribune”の記者、フリーで「The Village Voice」や「Mother Jones」、「Audubon」といった出版物の発行も行った。その作品は「Discover」や「New York Times」、「Natural History」、「Wired」をはじめ、多くの雑誌や新聞に掲載されるようになった。現在は、W.W.Norton社向けの自然と都市についての本に取りかかっている。

周 荣庭（Rongting Zhou）副教授
（中国科学技術大学科学伝播系科学技術政策・コミュニケーション学科学科長）

中国科学技術大学科学伝播系（USTC）の科学技術政策・コミュニケーション学科の学科長。1995年より同大学勤務。メディアマネジメント学の博士号を取得。2007～08年の間は、MITで比較メディア研究プログラムの客員研究者として勤務。国立財団が主催するネットワーク出版プロジェクトを指揮、研究対象をデジタルコンテンツ産業のあらゆる側面へとさらに広げていった。現在はMITのNew Media Action Labとともに、「Web 2.0環境における中国のNGO（Chinese NGOs in Web 2.0 Environment）」についてのプロジェクトの共同議長を務める。USTCの知識マネジメント研究所（Institute of knowledge Management）の共同設立者として、デジタルコンテンツやeコマースの分野で数々のオンラインアプリケーションを開発。大学生向けにデジタルメディア技術やネットワーク出版を、伝播系（コミュニケーション科）を専攻する院生にはデジタルメディアの作成やマーケティングを、そしてMBAの学生にはeコマースを教えており、教育を通じて彼らのオンラインビジネスの立ち上げに協力、すでに成功を収めた例もある。

西村 吉雄 客員教授（早稲田大学科学技術ジャーナリスト養成プログラム）

2005年より早稲田大学大学院政治学研究科科学技術ジャーナリスト養成プログラム（MAJESTy）客員教授。日経BP社編集委員,国立大学法人東京工業大学学長特別補佐を兼務。1965年,東京工業大学電子工学科卒。1967～68年,仏モンペリエ大学固体電子工学研究センター留学。1971年,東京工業大学大学院博士課程修了,工学博士。この間,マイクロ波半導体デバイスや半導体レーザーの研究に従事。1971年,日経マグロウヒル社（現在の日経BP社）入社。1979～1990年,『日経エレクトロニクス』編集長。その後,同社の発行人,調査・開発局長,編集委員などを歴任。2002～2003年,東京大学大学院工学系研究科電気工学専攻教授。その後,いくつかの大学の特任教授・客員教授を歴任。2004～2009年,東京工業大学監事として大学経営に携わる。現在の主要関心事は,ネットワークがインフラストラクチャとなった社会における,ジャーナリズム,産業構造,技術経営（MOT）,産学連携,大学改革など。著書に『硅石器時代の技術と文明』,『半導体産業のゆくえ』,『産学連携』,『情報産業論』,訳書に『中央研究所の時代の終焉』などがある。